

消防の顔

わたしは母とデパートに行くとき、化粧品売り場に出かけるのが楽しみだ。あの香水のいい匂いをかいでいると、とてもいい気分になる。それに近所にいる同級生のみち子のお母さんが勤めているから、つい気軽に立ち寄ってしまうのだ。

「こんにちは、おばさん。」

「あら、ゆうきちちゃん。今日は何のお買い物？」

「わたしはお母さんに付いて来ただけ。でも、わたしは化粧品やメイクをしてきれいになっていくお客様を見たり、いい匂いをかいだりするのが大好き。だから、ここにいるだけで楽しいの。いつもおばさんのメイクは、ばっちり決まってるし……。」

「そう言うってくれるとうれしいな。でもね、実はばっちりじゃないの。」

「えっ、どうして？」

「おばさんね、化粧品売り場にいるでしょ。ばっちり決めたところだけど、ゆうきちちゃんが好きな香水も付けていないし、ここにいても匂いのない化粧品を使っているのよ。」

ゆうきが理由を聞こうと思ったところで店にお客様が入って来たので、ここで話が途切れてしまった。

一学期もそろそろ終わる頃、学校で避難訓練が行われた。教室から校庭にみんなが避難した後、消防署の人と地域の消防団員が紹介された。

(あれっ、みち子のお母さんに似たような人が来てる。)

わたしはみち子の方をちらっと見た。みち子はすました顔で前を向いている。

自己紹介でみち子のお母さんだということがはつきりした。しかし、どうしてもデパートで見ているおばさんと、ここにいる消防団の制服を着たおばさんが別人に見えてしまうのだ。おばさんが手本となり実演することになった。すばやく火の近くに移動し、あつという間に消火せんを抜き火を消した。

家に帰ってからみち子のお母さんのことを母に聞いてみた。

「お母さん、今日、学校で避難訓練があったの。そのときね、みち子のお母さんが来てたの。お母さんはおばさんが消防団に入っていたことを知ってたの？」

「知ってたわよ。」

「そう、でもね。わたしはやっぱり、デパートで働いているおばさんが好き。」

「どうして？」

「だって、おばさんに一番似合っていると思うから……。」

「彼女の実家は大入だいにゅうでね、昼間、男性が勤めに出ているから、女性が消防団に入っ
て地域を守ってきたの。そういう女性を見て育ったから、去年、消防団に入った
のよ。それに、化粧品を扱う仕事をしているのに香水を付けないという徹底ぶり
はすごいわ。」

「へえ。そういえば、メイクはばっちりじゃないって、いつかおばさんが言った。



でも何で……。」

「火災が起きたとき、においに敏感になつていなきやいけないでしょ。救助するときに、被災した人が香水の匂いで気分を悪くすることだってあるのよ。そう言えば『くれ市政だより』に女性消防隊の記事が載っていたわ。」

と言つて、わたしに見せながら話を続けた。

「女性の消防団も男性と同じようにふだんはそれぞれの仕事をしていて、火事や災害が起きると、どんなにいそがしくてもかけつけてくれるの。毎月、消火訓練もしているのよ。七キロもあるホースを女性もかつぐんだって。それに、地いきの行事にも、事故が起きないようにけい備してくれて、町を守ってくれているの。」

わたしは、みち子のお母さんが仕事をしながら男性に交じつてそんなに大切なことをしてくれていることを知つてびっくりした。

ウウー　ウウー

ウウー　ウウー

二学期が始まり何日かたった真夜中、火事を知らせるサイレンが鳴った。外がさわがしくなり、わたしは目が覚めた。近所の家が火事になつたのだ。お父さんに付いてわたしも外に出た。バケツを持った近所の人が消火のために集まっていた。その人ばかりの中にみち子もいた。心配そうに見ている。

「消防団が来たぞ。」

サイレンの音とともに、消防自動車がとう着した。すばやくホースをかつぎ、坂を上ってくる。あつという間にホースをつなぎ合わせ、消火を始めた。後方にはみち子のお母さんもいた。いつもの姿とはちがい、真けんな顔をしている。放水したときにぬれたおばあさんの体を毛布で包み、何か話しかけながら救急車まで移動している。色白のおばさんの顔は炭で薄黒くなっていた。その後、火が消えたのを見て安心したわたしは家にもどつたが、おばさんたちは、男性の消防団に混じつて火事の片付けや、ホースの片付けを行い、飛び火しないように周辺を警備し、早朝まで働いていたそうだ。



学校に出かけようとしたとき、みち子のおかあさんはもうエプロン姿だった。

「おばさん、おはよう。昨日の火事、すぐに消えてよかつたね。ありがとう。」

「あれくらいですんでよかつたわ。」

「おばさん、デパートにいるときよりかつこよかつた。消防の顔ね。」

「そう見えた？」

と言つて、おばさんはにっこり笑つた。

冬休みになつた。夜、ねていると、どこからか火の用心が聞こえてくる。わたしは、秋の火事を思い出した。

「火の用心　カチカチ　マッチ一本　火事の元。」

「火の用心　カチカチ　マッチ一本　火事の元。」

町の消防団の見回りが始まつたのだ。わたしは、ひょうし木の引きしまった音を聞きながら、あのとのおばさんの顔が浮かんできた。